

【共通の設問】「なり」を識別せよ。(答え・解説は解答編)

【第1部】基礎編

Q1.

これは花なり。

Q2.

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。

Q3.

静かなり。

Q4.

鐘の音、響くなり。

Q5.

春なり。

Q6.

あはれなり。

Q7.

鳥鳴くなり。

Q8.

われは、都より下りたる者なり。

Q9.

物音、聞こゆなり。

Q10.

風なりけり。

Q11.

月清き夜なり。

Q12.

春の日、いとのだかなり。

Q13.

海の面、なほ平らかなり。

Q14.

聞けば、隣の翁も歌詠むなり。

Q15.

鶯さへづるなり。

Q16.

これは、母の形見の琴なり。

Q17.

明日、かの人、京を出づなり。

Q18.

杳の音遠ざかりて、客人は往ぬなり。

Q19.

名にし負ふ都鳥なり。

Q20.

春になりぬ。

【第2部】標準編

Q21.

いと尊き人なり。

Q22.

几帳の内に、女房たち笑ふなり。

Q23.

御車の音して、大納言殿、出で給ふなり。

Q24.

都は、なほはるかなり。

Q25.

心ある人にこそありけれ。

Q26.

軒の雫の音して、春雨降るなり。

Q27.

歌の道にすぐれたる人なりければ、人みな敬ひけり。

Q28.

夜更けて、遠く犬吠ゆなり。

Q29.

われはこの寺の主なり。

Q30.

嵐の音、いまだ止まざなり。

Q31.

あらたなり。

Q32.

月の出づるなり。

Q33.

暗くて見えねど、滝落つなり。

Q34.

この童は、かの聖の弟子なりけり。

Q35.

海辺に住む人なり。

Q36.

風吹く音なり。

Q37.

心知る人なりけり。

Q38.

人の物言ふ声すなれど、姿は見えず。

Q39.

あはれなる御方なり。

Q40.

松の梢を鳴らして、春の風吹くなり。

Q41.

人の心を知ることは、なほ難きなり。

Q42.

物のあはれ知る人なり。

Q43.

心なりけり。

Q44.

海なる船、いま帰るなり。櫓の音聞こゆ。

Q45.

この池は、いと深きなり。

Q46.

心ある人なりしが、いま見えず。

Q47.

人の言ふを聞けば、春日野には、はや若菜摘むなり。

Q48.

大臣なりけり。

Q49.

名にし負ふ都鳥にてあるなり。

Q50.

御堂のうちに経読み給ふなる声、いと尊し。

【第3部】 応用編

Q51.

いみじき宿世の人なりけり。

Q52.

風の音、いまだ激しきなり。

Q53.

月明らかなりけり。

Q54.

山里の冬は、ことに寒きなり。

Q55.

春来るなり。

Q56.

心ある人にて、いとあはれなりけり。

Q57.

入相の鐘ぞなる。

Q58.

かの人の来ぬは、道を知らざるなり。

Q59.

月の都の人なりけり。

Q60.

雨止みつなり。

Q61.

心ありし人なり。

Q62.

み吉野の山の秋風さ夜ふけてふるさと寒く衣うつなり

Q63.

静かなりける夜。

Q64.

都の中、いと賑はしきなり。

Q65.

まだ若き人なるを、はや世を背きぬ。

Q66.

月見る人多くなる。

Q67.

いみじき才ある人なるべし。

Q68.

風さやかなる夕暮れ。

Q69.

古き友、なほ生けるなりけり。

Q70.

夜更けて、あたり静かになりぬれば、人々みな寝入りぬ。

Q71.

心ある人なるぞよき。

Q72.

かの翁は、もとは都の人なりけり、と申す。

Q73.

この山の奥に、古き寺あなり。

Q74.

この男、物のあはれ知る人ならず。

Q75.

月明らかならむ。

Q76.

君や心ある人なるらむ。

Q77.

荻の葉に、秋風おとづるなり。

Q78.

げに、旅の空は心細きなりけり。

Q79.

月の都の人なるを、世の人は知らず。

Q80.

まだ幼き童なれば、文字も知らず。

【第4部】入試レベル

Q81.

昔、男ありけり。その男、身をえうなきものに思ひなして、京にはあらじ、あづまの方に住むべき国求めにとて行きけり。もとより友とする人、ひとりふたりして行きけり。道知れる人もなくて、まどひ行きけり。三河の国、八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河のくもでなれば、橋を八つ渡せるによりてなむ、八橋といひける。

Q82.

御簾の内より人の出で来る音すなり。

Q83.

人の心こそ、うつろひやすきものなれ。

Q84.

唐土に渡りたりける人なり。

Q85.

月明らかなる夜なれば、人々出でて遊ぶ。

Q86.

身は賤しき者なれど、心ばへはいとめでたし。

Q87.

見わたせば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける

Q88.

嵐山の紅葉、見る人多くなりぬ。

Q89.

帝、御殿の内におはすなり。

Q90.

笛を吹く人、門の前を過ぎて行きぬなり。

Q91.

かの琴弾く人は、故大納言の御娘なりけり、と聞く。

Q92.

この十五日になむ、月の都よりかぐや姫の迎へにまうで来なる。

Q93.

昔は歌よく詠む人なりしを、今はみな忘れにけり。

Q94.

物のあはれを知る人ならば、これを尊しとせむ。

Q95.

夜半に鳴く鹿の声は、いと悲しきなり。

Q96.

海辺に住む人らなりけり。

Q97.

月清く照る夜なりけり。

Q98.

これは、かの姫君の弾き給ふ琴の音なるべし。

Q99.

秋にならば、また来む。

Q100.

ゆく河のながれは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人とすみかと、またかくのごとし。